

國學院大學學術情報リポジトリ

三嶋神と『三宅記』のアルケオロジー：
三宅島の中世積石塚と石神信仰

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深澤, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001968

三嶋神と『三宅記』のアルケオロジー

—三宅島の中世積石塚と石神信仰—

深澤 太郎

要旨

三嶋神の鎮座地については、東京都三宅村の富賀神社を本宮とする主張も根強いが、その当否を論断することは難しい。しかし、三宅島の富賀神社や、薬師堂・御祭神社付近では、後の三嶋信仰につながる可能性が高い古墳時代や古代の「祭祀遺跡」が確認されている。また、12世紀以降の三宅島では積石に和鏡を供える風習が盛んとなり、在来の石神信仰に加えて、伊豆諸島に広く見られる積石信仰、さらには外来の経塚信仰が混交した独特の在地信仰が形成された。一方、15世紀半ばまでには成立し、三宅島の神主・島長であった壬生家などに伝世した本地物語『三宅記』（『三嶋大明縁起』）を、島に残された民俗儀礼と併せて分析してみると、伊豆諸島の創造→大蛇退治→大明神の垂迹と壬生氏の由来、といった単線的なストーリーだけではなく、噴火造島神話／鎮火神話／村落誕生神話とでも呼ぶべき神話群や、石神としての三嶋大明神像が立ち現われてくる。恐らく、在地の石神信仰が『三宅記』の成立に影響を与え、『三宅記』で描かれた世界観が現実の石神信仰を一層強固に支えていったのであろうが、このような見通しが広く認められるのか否か、積石信仰や和鏡の盛衰を具に比較しつつ、改めて検証していく必要がある。

キーワード

三嶋神、祭祀遺跡、『三宅記』（『三嶋大明縁起』）、積石遺構、石神

はじめに

三宅島の神主と島長を兼ねてきた壬生家や、南豆白濱神社の原家などに伝わる『三嶋大明神縁起』、通称『三宅記』は、薬師如来を本地とする三嶋神の縁起物語であり（三橋 1978、土岐 1981、阿部 2000）、三嶋大明神による伊豆諸島の創造や、大蛇退治の物語と共に、壬生家が大明神の「御代官」となった由来が語られている。新島の前田家本には文明13（1481）年の奥書が認められることから、原本は遅くとも15世紀中葉までには成立していたらしい。もとより『三宅記』は事実を記録した文書ではないが、大衆一般を聞き手にする唱導文芸とは一線を画しており、壬生家を中心とする島の祭祀・政治と不可分な関係にあったことが指摘されていることから（阿部 2001）、中世三宅島や伊豆地域における歴史的事実との接点を見出す上で重要な役割を果たすことが期待されよう。

官社として朝廷による恒例・臨時の奉幣を受けたり、後には幕府や有力な武家の信仰を集めたりした三嶋神も、そもそもは在地社会に支えられた存在であった。そうであるならば、『三宅記』に描かれた思想の本質を掘み取ることで、文書や考古資料のみ

では充分明らかにし得なかった在地的な信仰についても、一層生々しい実態が理解できるものと思われる。そこで本稿では、文献資料や考古資料から窺われる三宅島の信仰について俯瞰した上で、『三宅記』の根底に流れる思考を明らかにし、伊豆諸島の社会が『三宅記』の成立に与えた影響、もしくは『三宅記』が地域の文化形成に与えた影響について一定の見通しを立てることにしたい。

1. 三宅島と三嶋神

(1) 文献史料に見る三宅島と三嶋神

伊豆諸島における神々の造島については、『日本書紀』天武天皇13（685）年条から記事があるが、「三嶋神」の名は、『新抄格勅符抄』が載せる大同元（806）年の諺に、「伊豆三嶋神 十三戸 伊豆国。宝字二（756）年十月二日九戸。同十二月四戸。」とあるのを最古とする。また、『日本後紀』逸文の天長9（832）年条には、三嶋神と伊古奈比咩神が噴火の業によって「神宮二院、池三処」を作り、「名神」に預かったとことが記録されている。「神宮」とは溶岩流の形成した奇観、「池」とはカルデラのことであろうか。国史によれば、嘉祥3（850）年に三嶋神は従五位上に叙された

と見え、その後神階は上津島（神津島）に坐す本後の阿波神、その御子神である物忌奈乃神、そして後后とされる伊古奈比咩神らと共に順次累進した。また、延長5（927）年に奏進された『延喜式』の神名帳では、伊豆国加茂郡条の筆頭に「伊豆三嶋神社 名神大、月次新嘗」とあり、当社が伊豆随一の社格を誇ったことが知られる。

鎮座地については、東京都三宅村の富賀神社が本宮であり、後に静岡県下田市の白濱神社、そして三島市の三嶋大社へ勧請されたとする主張も根強いが、その当否を論断することは難しい（大場 1943、森谷 1975、原監修 1998 ほか）。三宅島阿古地区の富賀山に鎮座する富賀神社は、伊豆地区の薬師堂（東光山満願寺）・御祭神社、神着地区の御笏神社と並ぶ「三宅島惣鎮守」として知られるものの、寛永 15（1638）年に島方取締役の壬生為村が江戸へ出府した際、船が難破して帯同の古記録多数が失われたこともあって由来に不明な点が多いのである。

しかし、かつて境内の経堂に納められていた経巻類の内、応安 3（1370）年書写の『大方広仏華嚴経』巻第一には「三嶋本社富賀大明神宝殿」へ寄進するとの識語があり（東京都教委編 1958）、14 世紀半ばの三宅島では、富賀神社が三嶋神の本宮と看做されていたことは疑いない。また、安永 5（1776）年銘の棟札や、弘化 3（1846）年『島明細帳』の記載から（東京都教委編 1958）、近世には三嶋大明神と共に、富賀大明神・東國大明神などと呼ばれる神々が合祀され、境内社には壬生大明神・劔大明神・若宮大明神・見目大明神が祀られていたことがわかる。ところが、同じ『島明細帳』には「右、勧請之儀者、往古之義ニ付、是迄御渡海御役人様方度々御尋御座候得共、事実相分り不申候」とあり、富賀神社の由緒も次第に風化していった様子が窺われる。

(2) 三宅島の信仰遺跡

このように、古代三嶋神の本宮が三宅島に存在した事実を明証する確実な史料は得られていないが、考古学的資料に目を転じてみると、富賀神社や、薬師堂・御祭神社附近では、後の三嶋信仰につながる可能性を残す古墳時代以来の「祭祀遺跡」が確認されている（第 1 図）。

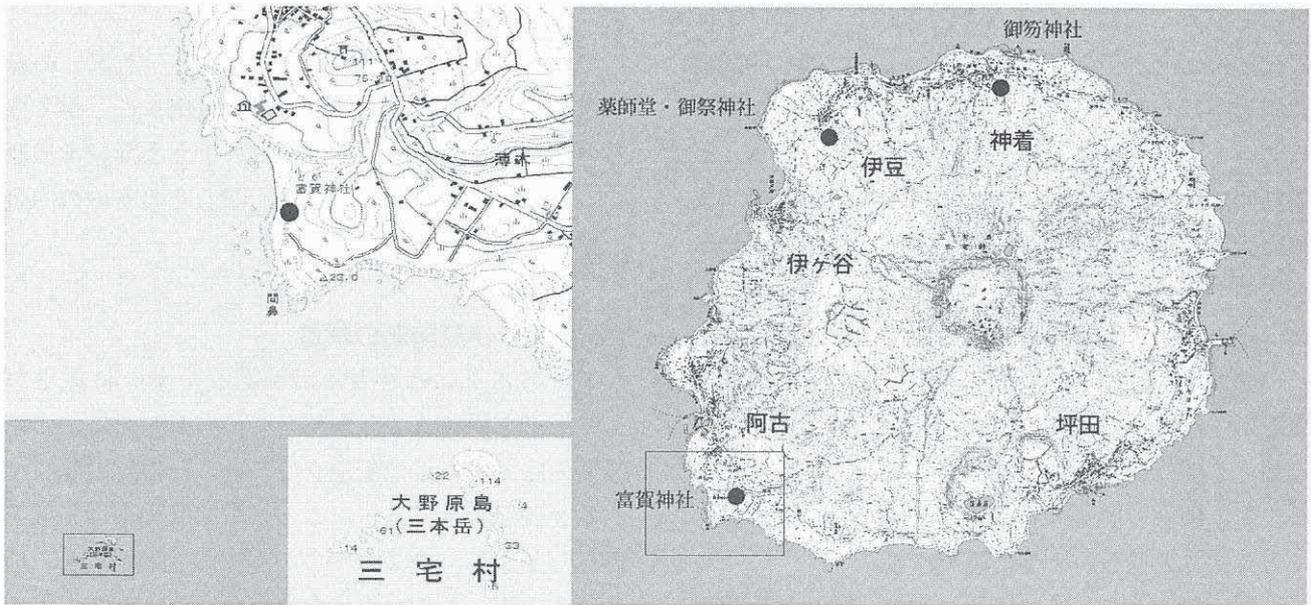
三宅村阿古地区の富賀浜遺跡は、富賀神社裏の海

岸沿いに見られる遺物包含層であり、「包含層は新島降灰層のすぐ下で、表土から 5 層目」に当たる（橋口編 1975、第 2 図）。但し、この「白ママ」と呼ばれる新島向山由来の仁和 2（886）年テフラは、「灰トジ」と呼ばれる神津島天上山由来の承和 5（838）年テフラなどに比べると肉眼での識別が難しい場合もあり（折原・福岡・大河原 2001）、改めて遺物包含層の再確認と、入念な分析を実施する必要がある。神社の境内を含めた周辺地域からは、古墳の副葬品と共通する勾玉・管玉・金環をはじめ、古墳時代から中世にかけての土器や須恵器が採集されており、富賀神社には古墳時代のものかと思われる直刀片も保管されている（第 4 図、東京都教委 1958、永峯編 1980）。目下現資料を確認できないものも多く厳密な時期を特定するのは難しいが、古墳時代のうちに後の富賀神社へ続く祭祀の萌芽を認めることができよう。

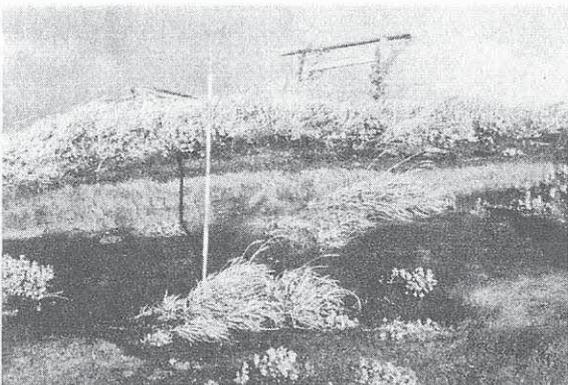
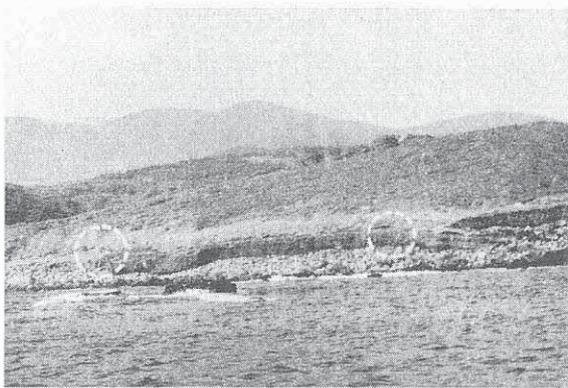
また、伊豆地区鎮座の薬師堂・御祭神社では、参道入り口の薬師前遺跡から複数の石で蓋をした土坑が発見され、その中から古墳時代後期に属する 7 点の土器が出土している（第 6 図、橋口編 1975）。更に、薬師前遺跡からやや南に下った西原 D 遺跡では、勾玉形の石製品が見つかった（第 5 図、橋口編 1975）。これら古墳時代の「祭祀遺物」が出土した遺跡は三宅島の西岸に集中しており、何れも他の島々を望む好適地を選択したものと考えられる。

じっさい、富賀浜遺跡から西を望むと、神津島や三本根と呼ばれる大野原島が見える（第 3 図）。大野原島は 3 つの岩礁からなる神秘的な姿を見せており、薬師堂・御祭神社で正月 8 日に行なわれる「八日様」の「御四楽」儀礼でも、三本根の神と思われる「大根原の太后」が登場する神歌を用いていることは注目されよう（東京都教委 1958）。考古学的事実と民俗事例を直ちに関係付けることは慎むべきかもしれないが、或いは古墳時代の三宅人も、三宅島それ自体のみならず、沖の島々や岩礁を崇拝の対象としていたのではなかろうか。

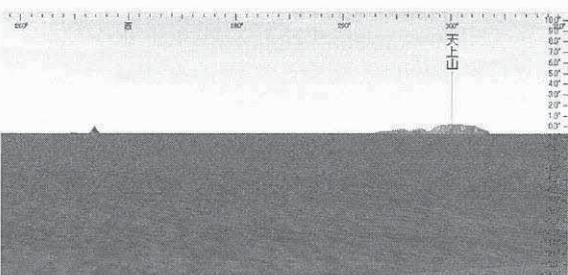
ところで、三宅村教育委員会からは、最近になって富賀浜遺跡で奈良三彩の破片が採集されたとの教示を得た（第 4 図、三宅村教委 2008）。奈良三彩は、唐三彩の影響を受けて造東大寺司が生産した 8 世紀を代表する焼き物であり、主に仏教寺院の普及に



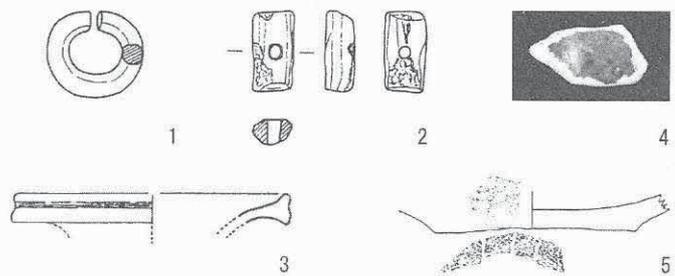
第1図 東京都三宅村 富賀浜遺跡・関係社堂



第2図 富賀浜遺跡 遠景・近景 (橋口編1975)

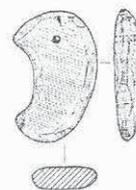


第3図 富賀浜遺跡より西を望む
カシミール 3D を用いて作成



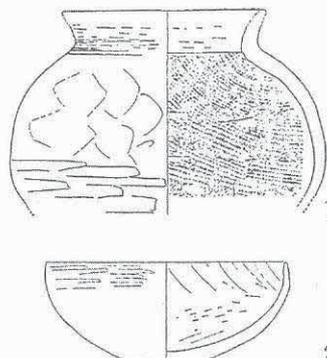
第4図 富賀浜遺跡出土遺物

- 1. 金環・2. 玉: 1/2 (永峯編 1980)
- 3. 須恵器片: 1/3 (橋口編 1975)
- 4. 奈良三彩: 縮尺不同 (三宅村教委 2008)
- 5. 土師質土器片: 縮尺 1/3 (橋口編 1975)



第5図 西原D遺跡出土遺物

- 勾玉形石製品: 1/2 (橋口編 1975)



第6図 薬師前遺跡出土遺物

- 1. 甕形土器・2. 杯形土器 1/2 (橋口編 1975)



第7図 観音菩薩立像

海蔵寺所蔵 (MOA 美術館 1992)

伴って地方に波及したが（吉田 2001）、福岡県宗像郡大島村に所在する沖ノ島遺跡のように国家的規模の祭祀が行なわれた遺跡から出土する事実も指摘されている。ちなみに、伝世の由来は不明ながら、三宅島坪田地区の海蔵寺には離島では珍しい奈良時代の金銅仏が残されており（第7図）、これが当初から島内で伝世したものならば、奈良三彩などと共に島へ搬入されたと考えることもできよう。天平宝字2（756）年に、三嶋神に対して封戸が与えられた事実も示唆的であり、これらの諸事実から見ると、三嶋神との関係については一先ず措くとしても、奈良時代には国家の関与した祭祀が三宅島にも及んでいたと考えると大過ないように思われる。

一方、その後の三宅島では、国家、或いは伊豆国府などの公権力が島の祭祀に関与した積極的な証拠は認められない。しかし、12世紀以降は多数の和鏡が持ち込まれたようであり、伊豆諸島で発見された中世和鏡の内、実に半数近くの82面が三宅島で確認されている（永峯ほか 1992・1993）。富賀神社や御笏神社などに残された伝世鏡も少なくないが、一部は「地主様」などと呼ばれる屋敷神の積石塚に供えられていた。正式な発掘調査で得られた和鏡は、坪田地区中郷の積石塚から出土した13世紀の菊花双雀鏡のみであるが（東京都教委編 1958）、積石塚自体は島内各所に構築されている（橋口編 1975）。

このような現象は三宅島に限ったことではなく、伊豆諸島では大島の和泉浜B遺跡や（永峯・米川編 1991）、利島の堂ノ山神社境内祭祀遺跡・阿豆佐和気命神社境内遺跡のように（永峯ほか編 1994、青木ほか編 2005）、12世紀後半から積石塚や石祠が営まれたり、或いはそこに和鏡などが数世紀に亘って供献され続けたりする事例が顕著になっていく。三宅島においては、これらの積石信仰は勿論、雨乞いの信心などに際して海岸の円礫を採集し、村の社に供える「垢離」取りの習俗が現在でも継続して残されているというが（三宅島史編纂委 1982）、中世末には、礫石経を伴う大型積石塚群である伊豆地区の物見処^{モレンド}遺跡が造営されるなど（吉田編 1983～2000）、在来の石信仰に加えて、伊豆諸島に広く見られる積石信仰、そして外来の経塚信仰が混交した独特の在地信仰が形成されたのであった。

2. 『三宅記』の物語

では、このような歴史的事実と、『三宅記』の記述との間には、如何なる関係性を見出すことができるのであろうか。ここでは、そのような疑問を追及する前提として、まずは『三宅記』そのものの内容を瞥見しておこう。

(1) 前段：伊豆諸島の創造

天竺の帝王には8人の后があったが、40歳を越えても子を儲けることができずにいた。そこで帝王最愛の後であった光生徳女は、自らが薬師の縁日である8日生まれであったことから薬師如来に子種を願ったところ、60歳ばかりの黒衣の老僧が現れ、後に「金の笏」を与えて姿を消した。それから一年が過ぎた正月8日には王子が誕生し、「一大薬師」と名付けられる。王子が七歳のときに母は亡くなったが、彼は美しく成長し、継母からは想いを寄せられた。しかし、その想いを受け入れなかったため、継母の讒言を得て国を追われる。

高麗を経て日本に辿り着いた王子は、富士の絶頂で出会った「神明」に、故国へ帰って父の勘当を解かれた後、伊豆半島沖の海中に土地を造って住むことを勧められた。そして、父に許されて再び日本へ向かおうとする途上、ガンジス川のほとりで水神に暇乞いをしたところ、不孝の罪によって川に沈められた上に蛇体にされた王子と対面する。蛇体の王子も「一大薬師」と同じ薬師の化身であり、二人が名残りも惜しく別れた後には、蛇体の王子の正体である「薬師の尊体」が河原石の上に現れた。そこで王子は、この尊体を肌身離さず持ち歩くことにしたのである。また、「丹幡の國」では、当地の翁から伊豆沖に島を造って住むべきことや、「三嶋大明島」と名乗ること、正体は薬師如来であることなどを夢語りされ、翁の子である「若宮＝普賢菩薩」・「劔＝不動明王」・「見目＝大弁才天」を従者に加えた。

後に、王子は神明と再会して海中を譲られる。そして、大明神へと垂迹した王子らは、龍王たちや大小の神祇の協力を得て海中の石を積み、島々を「焼出」した。大明神は三宅島に宮を建て、「大島」、「あらた島」、「神あつめの島」、「三宅島」、「おきの島」に后を置いて多くの子を成した。そして、龍神たちには島の上に掘った穴へ海底の石を運ばせ、これを

水火の雷に焼かせて湯としたところへ沖の波を打ち掛けて島を広くしたのだった。

(2) 中段：大蛇退治の物語

箱根の湖畔には370歳の翁と姥が住んでいたが、翁は不漁に悩み、舟を魚で満たしてもらえらば3人娘の誰でも湖の主にし出そう、と念じてしまう。その結果、沢山の魚を得ることができたが、水底の大蛇が三女を得ようと追ってきた。

鳩になって富士の絶頂へ逃げた三女は、岩の中に隠れていたところを三嶋大明神と出会い、共に大島を経て三宅島へ逃れる。そこで、大明神たちは一計を案じ、大蛇を酒食でもてなすことにした。そして、蛇が寝入ったところを、劔やあらた島の「第三の王子」らに討たせたのである。ところが、蛇が三太刀を浴びせられた（4分割された）顛末を「いかるの浦」の石の陰から見ていた「みとの口の后」の左目は、斬りつけられた大蛇の尾が当たって潰れてしまう。

大蛇退治は済んだが、三女の姿が見当たらない。見目が探してみると、紅梅の衣を着た三女が躑躅の中に紛れていた。聞けば、蛇を大蛇の所縁かと驚いてのことだと言う。しかし、怒った大明神は島に躑躅があっても咲いてはならぬと命じ、蛇は島から追放されることになった。やがて彼女の姉妹たちも見つかり、大明神は3人姉妹を后とし、「ちやく女」を島の酉に、「次の后」を未に、そして「三女」を辰に置いて子を産ませ、所々に宮を作った。しかし、嫡女は「みとの口の后」を嫉み、幼い王子を抱いて「いかるの海」へ飛び込んで石になってしまった。

(3) 後段：大明神の垂迹と壬生氏の由来

壬生氏の先祖である「壬生の御館」は、天人の舞う「あつまあそび」、「するか舞」といった芸能を身につけた人物であり、富士の絶頂で出会った三嶋大明神に付き従うこととなる。

ところで、大島へ流された「ゑんの行者」を訪ねた神々の一人が語ったことには……わたしは伊予の凡夫で立花の清政と申したが、40歳を越えるまで子がなかった。そこで、「はつせの十一面」に願を立てて男の子を得たものの、伊予の「しやくの浦」で鷲にさらわれてしまう。せめて屍だけでも、と深山へ分け入って16年。人の願いを叶えることを仏神

に祈っていたが、その功が積もって垂迹し、三嶋大明神と呼ばれるようになった……。ちなみに、このエピソードは、遊行宗教者によって語られ、南北朝期に安居院で編まれたと見られる『神道集』所収の「三嶋大明神事」を引用改変したものとみられる。

閑話休題。年月が過ぎ、大明神は、「王子の体＝薬師の尊体」を彫り込んで肌身離さず持っていた石の「しやく」を「手しるし」として御館に与え、500年後に日本の守護神となることを告げる。また、島を4つに分けて、后や王子たちの宮所を定め、「いつ」の「入海」には嫡女、「つほとた」の「水海」の並びの峯には次女、「神つき」の「しとり」の浦には三女を祀らせた。自身の宮は「あこ」に置くこととし、今後は声にて託宣を下すことを約束した大明神は、推古天皇壬巳年の正月8日の午の時、遂に凡夫の姿を石にうつして垂迹となった。

それから壬生御館實秀は、嫡子實正に明神の「御代官」としての作法を論ず。月の半分は祭祀に尽くせと教え、天人から学んだ舞も伝授した。そして、實正に「手しるし」を与え、537歳にして本国へ帰ると言い残して姿を消したのであった。また、大明神は壬生實成に亀卜の技術を教えた。更に大明神は、島は我が体、島の草木は我が毛、島の人々は我が子であるとし、様々な掟を衆生に伝えるよう命じて、實成と共に白濱へ赴く。しかし翌年、實成が三宅島へ帰ってみると、后たちが島を壊そうとしている。「みがいの後＝嫡女」が言うには、「八王子の母御前＝三女」と「二の宮の母御前＝二女」が境論を起こしたというのだ。そこで大明神は、「神つき」と「つほとた」の境界を決定する方法を伝授し、今後は實成の言葉を我が言葉として従うように命じた。

その後、實成は長男實安を儲け、實安も123歳で大明神の御前に朝夕伺候すると言って姿を消したが、壬生の血筋は「御代官」として、末世まで明神の「手しるし」を伝えるのである……。

3. 『三宅記』の世界観

(1) 噴火造島神話／鎮火神話／村落誕生神話

以上に見てきた通り、『三宅記』の骨格は、一人／多数の子を持つ親の愛情が過大／過小であったために、登場人物は蛇／鳥となって水底／山上へ身を追われるが、自然神・水神である蛇体を身につけ

／切り、大地を作る／分割する、というものである。各段は、それぞれ独立した物語の体裁をとっており、個々のエピソードは文脈的に破綻している箇所が少なくないが、基本的な構造は全く異ならない。つまり、『三宅記』編纂当時の信仰や村落の構成は、前段、中段、後段へと反転しながら展開する因縁生起の結末であると示される。『三宅記』においても、『神道集』に見える伊予大三島の「三嶋大明神事」や、箱根権現の「二所権現事」などの物語と同様に、貴種の「申し子」が放浪の果てに神となるモチーフは採用されているが、本書の特質はまた別にある。

結論から言えば、これらの二項対立の中で大きな役割を担っているのは蛇である。蛇と同体の大明神が龍神たちと協力して島造りを行なう前段の物語が、剣で蛇を切り刻む中段の物語に変換されたのは、おそらく島の噴火と関係があるように思われる。前段の蛇は、ガンジス川の水底に棲む蛇神や、海中の龍神であり、噴火造島の業に参与する水神である。一方、中段が前段の物語を反転させたものである事実から判断すれば、箱根の湖から追ってきた大蛇は、噴火の脅威を引き起こす山神にほかならない。つまり、『三宅記』の前段と中段は、水神たる蛇の力を得て伊豆諸島世界を創造する噴火造島神話と、山神たる蛇の力を制御して噴火を取める鎮火神話と考えることもできる。

また、大地を創造する前段の造島神話に対して、中段と後段では蛇体の4分割、村落の4分割、即ち阿古・伊豆・神着・坪田の村落誕生神話が語られる。両段ともに、箱根の3人娘を島内の3箇所に住ませ、大明神自身は阿古に居所を定める結末が一致しており、かえって蛇の分割＝島の分割、という共通性が浮き彫りになるのだ。つまり、『三宅記』に描かれた物語群を仔細に検討してみると、伊豆諸島の創造→大蛇退治→大明神の垂迹と壬生氏の由来、といった単線的なストーリーだけではなく、噴火造島神話／鎮火神話／村落誕生神話とでも呼ぶべき神話群が私たちの目の前に立ち現れてくる。

(2) 破壊／増殖、逃亡／接近

しかし、中段の終わりで唐突に語られる「みとの口の后」が蛇の尾で失明したエピソードと、彼女を嫉んだ箱根の嫡女が、幼子を抱いたまま「いがる」

の海に入水して石となった物語の解釈は難しい。そこで、私たちの視野を三宅島の民俗儀礼まで広げてみよう。ここでは、正月6日から8日まで行なわれる「御太刀様」の「島めぐり」を取り上げる（東京都教委1958）。

この行事では、6日早朝に御笏神社を出発した「御笏之宮殿」と「御太刀様」が鈴の音を鳴らしながら時計回りに島内を巡り、その夜は富賀神社に泊まる。ちなみに伊豆地区では、「御太刀様」と正面から出会うと目が潰れてしまう、と伝えられている。7日は富賀神社で神事を行ない、薬師堂・御祭神社へ向かう。8日の祭りは特に「八日様」と呼ばれ、西面する御祭神社の前庭で祓と巫女の神楽舞を行なう「奥の院の儀」から始まる。巫女は神楽歌にあわせて舞うが、参列者は舞が終わらぬうちに振り返りもせず石段を駆け降りる。次いで、石段下の小屋で行なう「御四楽」がある。これは直会の儀であろうか。また、石段下では「庭の舞」（「王の舞」・「剣の舞」）が舞われ、左手の薬師堂内と裏山で行なう「鬼火の舞」が終わると、「御太刀様」の一行は御笏神社へ還御する。

その中で、「王の舞」では狩衣に女面を着けた人物が両手を組んで現れ、何も持たずに舞う。次に、男面の人物が木太刀を持って同じ舞を披露する。「剣の舞」では、狩衣に鼻高面を着けた人物が本物の剣（御太刀様）を持って舞う。次に、狩衣を着用せず、下腹部に木製の男根を着用した癒見^{べしみ}面の人物が木太刀を持って同様に舞うが、これを「チンノヨダレ」と呼ぶ（第8図）。「鬼火の舞」は、社人が唱え言をしながら薬師堂内を巡った後、木太刀と松明を持って薬師堂裏山に登り、椎の大木の根元に松明を置いて終わる。

『三宅記』中段では、蛇の尾で「みとの口の后」の左目が潰れたとする。また、伊豆地区の伝えでは、「島めぐり」の「御太刀様」一行に正面から出会うと目が潰れてしまうと言う。「御太刀様」は、即ち「蛇の尾」なのである。そして、蛇体は『三宅記』前段でガンジス川に沈められた「王子」そのものであるから、三嶋大明神も「御太刀様」と同体なのだ。「王の舞」では女面と男面の人物が舞い、「剣の舞」では前後の演者が剣と木太刀を持って舞うが、むしろ本来は剣と木製男根が対応するものと考えた方が良



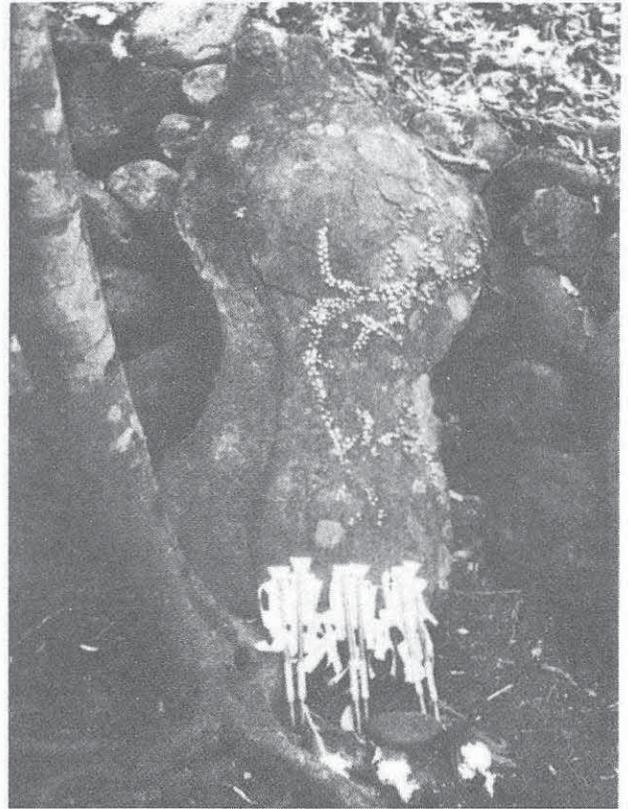
第8図 薬師堂 チンノヨダレ (東京都 1958)

かろう。ここに、女と男、そして太刀と男根の対応関係を見ることができる。つまり、大明神の象徴である「御太刀様」は、生殖・増殖能力の象徴たる男根に等しい。なお、「八日様」冒頭の「奥の院の儀」では、参列者が祭儀の途中で一斉に石段を駆け下りる一方、最後の「鬼火の舞」では社人が松明を持って裏山へ登る。この松明は、山の頂から吹き上げる火炎の象徴であろうか。

一連の祭儀における神楽歌などについては十分に検討していないが、「八日様」で演じられる数々の芸能は、男／女、剣・破壊／男根・増殖、逃亡／接近、という要素から成り立っていることがわかる。おそらく、これらの記述や芸能は、暴力と生殖の相似性を示そうとしているのだ。そして、噴火という自然の暴力が、新しい島や大地を生み出す現象と表裏の関係にあることも、古い三宅島の人々は理解していたに違いない。

(3) 「シャクジン」としての三嶋神

つまり、箱根の嫡女が「みとの口の后」に感じた嫉妬心とは、蛇の尾との接触＝大明神の男根との交わりに起因するのだろう。破壊／生殖の結果、箱



第9図 富賀神社 三島様 (廣瀬 1987)

根の嫡女は幼子を抱いた石神になるのだが、換言すれば石神は母に抱かれた幼子とも言える。『三宅記』では、神々が石の上に現れたり、死とともに石に変化したりするエピソードに事欠かない。そもそも海岸転石が豊富な三宅島らしく、島そのものが海底の石を積み上げて焼出したものであると語られるのである。「八日様」の日、大明神の男根とも考えられる「御太刀様」は御笏神社から運ばれてくるが、御笏神社はオ・シャクジンの社であり、本来は石神を祀ったものと推測される。神主壬生家に伝えられたとされる明神の「手しるし」＝御神体は、実際には長さ約20cmの木製笏に小さな鏡を嵌め込んだものと言われているが(三橋 1981)、これは『三宅記』に見える「王子の体＝薬師の尊体」を彫り込んだ「石のしやく」に相当するものであろう。ちなみに、三嶋大明神が生まれる前に、母の光生徳女は黒衣の老僧から「金の笏」を授かっている。三嶋大明神は、石という母胎に抱かれたシャクジンなのである。じっさい、富賀神社には、現在も「三島様」と呼ばれる火山弾が残されており(第9図)、本来の御神体であった可能性も指摘されている(廣瀬 1987)。

いずれにせよ、『三宅記』が語る三嶋神の根源は

この石神にある。そして、石神に込められた霊力は、卵のような殻を破壊しなければ触れることができない。「八日様」は、薬師の縁日であると共に、大明神が石神となった縁日でもある。その日の「王の舞」では、女面を着け、剣や木太刀を持たずに両手を組んだ人物が現れるが、これは大明神が助けた箱根の翁の娘と考えられている。と同時に、太刀を持たず、最初は両手を組んでいる事実を高く評価するならば、これを四肢を持たぬ蛇体の表現と見ることもできる。一般に男神と看做される蛇が女面で舞われることには不審もあろうが、実はこの蛇体こそが本当の「王」なのだ。「御太刀様」や「チンノヨダレ」は、蛇体であり、しかも女体であり、そして自然の「王」でもある石神を破壊して、生命の根源に恐る恐る近付いていくのである。

5. 積石信仰と『三宅記』

さて、『三宅記』の検討から、そこに描かれた三嶋大明神の本質は石神であることが浮かび上がってきたが、この事実は歴史的な現象と如何に結びついてくるのだろうか。

14世紀半ばには富賀神社が三嶋神の本宮と看做されていたことが確実であり、遅くとも15世紀半ばには『三宅記』が成立していたと考えれば、その前後における三宅島、伊豆諸島の社会には、『三宅記』の物語を納得して受け入れる条件が整っていたはずである。『三宅記』では、三嶋大明神をはじめとする多くの神々が石神となっていく。つまり、石に神が宿するという感性が、地域の人々に広く共有されていたことが予想されるのである。



第10図 物見処遺跡 1号積石遺構 (筆者撮影)

既に見てきた通り、丁度その時期の三宅島や伊豆諸島では積石塚が築かれ、そこに和鏡が好んで供えられていた。積石塚は数世紀に亘って信仰の対象となるものもあるが、和鏡の年代からすれば、かかる信仰形態の初源は『三宅記』の成立に先立つ12世紀後半頃に求められるかと思われる。そうすると、15世紀半ばまでには成立していた『三宅記』の記述は、荒唐無稽な絵空事などではなく、既存の在来信仰を反映した説得力ある物語であったと考えるのが妥当であろう。

三宅島の事例ではないが、先に触れた利島の堂ノ山神社境内祭祀遺跡や、阿豆佐和気命神社境内遺跡では12世紀後半から積石塚や石祠が構築されたが、出土遺物の年代的なピークは15世紀に当たるという(永峯ほか編1994、青木ほか編2005)。また、中世末には三宅島でも物見処遺跡のような大規模積石塚が出現し、礫石経も見られるようになる(第10図)。このような石神信仰に通じる遺跡・遺構は、『三宅記』の世界観と無関係であったようには思えない。

在地の石信仰が『三宅記』の成立に影響を与え、『三宅記』で描かれた世界観が、現実の石神信仰を一層強固に支えていく。このような見通しが広く認められるのか否か、積石信仰や和鏡の盛衰を具に比較しつつ、改めて検証していく必要があるものと考えている。

おわりに

『三宅記』の読み解きは、期せずして芸能者の神でもある「宿神」論に近づいていくように思われるが(中沢2003)、じっさい三嶋神の「手しるし」を守る壬生家は、東遊や駿河舞といった芸能を伝える家柄とされる。もちろん、南北朝期から室町中期の間に編まれたと考えられる『三宅記』の認識を、直ちに前後の時代に敷衍することは難しい。しかし、三宅島の精神史に『三宅記』以前・以後という定点を与える上で、今回の試みは重要な示唆を与えてくれたのであった。

ここでは式内社に祀られた「名神」としての三嶋神のイメージを離れ、ローカルな石神信仰と中世積石信仰との関係を紐解くことができた反面、それらの具体的な展開過程については今後の検討に俟つ

ところが大きい。中世伊豆諸島の積石遺構の中には、『三宅記』の編纂とほぼ同時期に営まれた例もあろうから、同時代資料同士の検討を積み重ねていくことで、三宅島、伊豆諸島、或いは伊豆における信仰の内奥を読み解くことが期待されるのである。

参考文献

- 青木豊・内川隆志・須藤友章編 2005『阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡』 國學院大學海洋信仰研究会
足立鎌太郎 2002『南豆神祇誌』復刻版 羽衣出版
阿部美香 2000「本地物語としての『三宅記』について」『昭和女子大学文化史研究』4 昭和女子大学
阿部美香 2001「本地物語としての『三嶋大明神縁起』—その成立と機能—」『説話・伝承学』9 説話・伝承学会
MOA 美術館編 1992『伊豆国の遺宝』 MOA 美術館
大場磐雄 1943『伊古奈比咩命神社』 伊古奈比咩命神社社務所
杉原重夫・福原孝昭・大川原竜一 2001「伊豆諸島、神津島天上山と新島向山の噴火活動」『地学雑誌』110-1
東京都教育委員会編 1958『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第一分冊 東京都文化財調査報告書6 東京都教育委員会
土岐昌訓 1981「三嶋大明神縁起の成立背景」『神道宗教』105 神道宗教学会
永峯光一編 1980『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書』大島・三宅島 東京都島嶼地域遺跡分布調査団
永峯光一・米川仁一編 1991『東京都大島町 和泉浜B遺跡発掘調査報告書』 東京都教育委員会
永峯光一・青木豊・川崎義雄・内川隆志 1992「伊豆諸島出土・伝世和鏡基礎集成」『國學院大學考古学資料館紀要』8 國學院大學考古学資料館
永峯光一・青木豊・川崎義雄・内川隆志 1993「増補伊豆諸島出土・伝世和鏡基礎集成」『國學院大學考古学資料館紀要』8 國學院大學考古学資料館
永峯光一・青木豊・内川隆志編 1994『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』 利島村教育委員会
中沢新一 2003『精霊の王』 講談社
橋口尚武編 1975『三宅島の埋蔵文化財』 伊豆諸島考古学研究会
原秀三郎監修 1998『図録 三嶋大社宝物館』 三嶋大社宝物館
廣瀬進吾 1987『三宅島史考』
三橋健 1978「三嶋大明神縁起」『國學院大學紀要』16 國學院大學
三橋健 1981「佐伎多麻比咩命神社」『式内社調査報告』10 式内社研究会
三宅島史編纂委員会 1982『三宅島史』 三宅村役場
三宅村教育委員会編 2008『三宅村郷土資料館』(パンフレット) 三宅村郷土資料館
森谷ひろみ 1975「三宅島式内社に関する歴史地理学的研究—第一報 序論—」『神道宗教』75～79 合併号 神道宗教学会
吉田恵二編 1983～2001『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡』 國學院大學考古学実習報告6～35 國學院大學考古学研究室
吉田恵二 2001「奈良三彩の生産と伝播」『考古学ジャーナル』475 ニュー・サイエンス社